2／夢を実現するため

広島県立大柿高等学校から十数年ぶりに江田島市消防本部へ――。小学生の頃から「消防士になりたい」という夢を持ち続け、夢を叶えた早稲田悠生（わせだ・ゆうき）さん。一度も島を出ることなく夢を叶えた早稲田さんの『これまでとこれから』とは。

『あの人たちのような消防士に』

江田島町鷲部にある江田島市消防本部。「おはようございます！今日はわざわざ足を運んでいただき、ありがとうございます」と元気よく出迎えてくれた早稲田さんは、新庁舎が完成したその年に採用された、着任3年目の消防士。生まれてから一度も島から出ずに消防士になるという夢を叶えた、今どき珍しい青年だ。「消防士になりたいと思った一番大きなきっかけは、東日本大震災のニュースだったんです」

日本人にとって決して忘れることのできない東日本大震災。日本中を激しい揺れが襲い、目の当たりにした自然災害が及ぼす被害の大きさへの衝撃がたくさんの人の胸に強く刻まれた。当時小学生だった早稲田さんも、そのうちの一人。ニュースや映像を通して見る被害の大きさに衝撃を受けた。「自然災害の恐ろしさを実感し、愕然としました。そんな時、テレビから流れてきた、危険な場所で活動を続けるハイパーレスキュー隊の映像を見て目が離せなくなったんです」大規模火災の消火活動や、福島第一原発での放水活動など、命を落とす危険性の高い現場で、困難に立ち向かうハイパーレスキュー隊の姿に早稲田さんは釘付けになった。「とても危険な現場にもかかわらず、人のために活動し続ける姿を見て、純粋に格好いいと思ったんです。『命を懸けてでも守る』という姿を初めて見て、僕もこの人たちのように誰かを守る職業に就きたいと思いました」その時から、早稲田さんの夢は『あの人たちのような消防士になる』になった。憧れのあの人たちのように東京消防庁に勤め、ハイパーレスキュー隊になる！

しかし、高校3年生の時に江田島市で消防士になろうと決心した出来事が起きた。「お世話になっていた親戚の人が、目の前で亡くなって。僕は何もできなかった。とても悔しく、悲しくて…その時、『僕の周りにいる身近な人たちを守りたい』と強く思ったんです」島に残ろうと決心した早稲田さんは、大柿高校卒業生としては十数年ぶりに誕生した、江田島市の消防士となった。

貫く意志と、努力

「実は、高校から県外の学校へ進学する予定だったんですよ。その時も夢は変わらず消防士になることだったんですが、学ぶ場所は関係なく、自分が努力さえすれば道が拓けるのではないかと思ったんです。地元で、時間に追われることなくゆっくり勉強ができる。だったら大柿高校へ行こうと思って、進路を変えました」

進む道は、すべて自分で決める。中学校も、やりたいことがあったから能美中学校へ通うことに決めた。消防士になるとあの時決めたから、消防士になった。「僕は頑固者なんです。小さい頃から、決めたことは絶対。そのために何をすればいいかという判断も、誰に何を言われようが自分で判断する。言い換えればわがままなんですけど（笑）、両親が本当に僕のことをよく理解してくれて、その度に応援してくれる。だから僕も意志がブレることなく、夢を叶えることができたんでしょうね。両親には本当に感謝しています」

江田島市消防本部は、日々災害対応に向けた訓練をしながら、職員一丸となって、安心・安全なまちづくりに努めている。最後に、夢を叶えた早稲田さんに消防士として今の夢は何かと質問をした。「自分の過去の経験、そして今消防士となっての経験をふまえて、『救命士』になりたいと思っています。救助活動などで最善な処置、アプローチができるようになるために、救助隊の救命士として活動していきたい。何年かかるかはわかりませんが、自分なりに努力を続けて、いつかは立派な救命士になれるよう、これからも頑張ります」

これまでも貫く強い意志と努力する姿勢を持ち続けたことで夢を実現させてきた。早稲田さんが救命士として江田島市で活躍する日は、近い将来必ず来るだろう。

早稲田悠生

わせだ・ゆうき

／江田島市大柿町出身

2000年11月29日生まれ

能美中学校から広島県立大柿高等学校へ進学、卒業後に江田島市消防本部に勤め、現在消防士として市内で活動している。

3／好きな場所で好きな仕事を

「お客様から絵を描いてもらったり、メッセージをもらうこともあるんです」と満面の笑みでエピソードを話してくれる田畑神菜（たばた・かんな）さんは、江田島荘でフロントスタッフとして働いている。今の彼女からは想像できない、過去のお話や江田島荘に勤務することとなった経緯などをたくさん話してもらいました。

オペア留学への挑戦

『ニコニコ可愛らしい女性』という言葉が良く似合う田畑さんは、埼玉県出身の25歳。江田島市には、小学2年生の時に家庭の都合で引っ越してきた。高校卒業後、都会に憧れて東京の大学へ進学したが、環境に慣れることができず、上京して半年で大学を中退することになった。「新しい環境にとにかく疲れて…家から出ることが怖くなってしまったんです」島に戻ってからは劣等感との闘い。進学や就職で毎日奮闘している友達を見ては「自分だけ何をしているんだろう」と落ち込む日々が続いたという。中々外に出れず、どんどん人との交流も減っていった。「両親にも申し訳ないし、本当に落ち込んでいました」

そんな中、田畑さんに突然の転機が訪れる。

「体調が回復してきた時に、ふと『オペア留学』という言葉を耳にしたんです」オペア（Au Pair）留学とは、現地家庭にホームステイをしながら、学校に通ったり、子どもの面倒を見てお給料をもらいながら海外で暮らすことができる留学制度。元々、国際交流に興味があり、英語を学びたいという思いがあった田畑さんは、インターネットで情報を収集し、思い切ってこの制度を利用して留学することを決断した。「今思えば、少し前まで外にも出れなかったのに、突然海外に行くなんて凄いなぁと思うんですが（笑）、その時の私には『何もなかった』ので。やりたいことも、夢もなかった。だから、自分探しの旅に行っちゃえ！と思いきった決断ができたんだと思います」田畑さんはアルバイトをしてお金を少しずつ貯め、オーストラリアに飛び立った。

海外で気付いた島への思い

ホームステイ先にて家の掃除と週1回料理の提供。合間に寿司屋でのアルバイトをしながら過ごすことになった田畑さん。その後、シェアハウスに生活を移し、イチゴ農場で働くなどして、オーストラリアで2年を過ごした。「勢いで行ったのもあって、無我夢中でした。その時からですかね、性格がガラッと変わったのは」現地で出会った人たちに恵まれ、楽しく過ごすことができた2年間。落ち込んでいたことは忘れ、語学を勉強しながらとても有意義な時間を過ごしていたという。

帰国後、やはり海外で仕事をしながら語学を学びたいという思いが捨てきれず、今度はニュージーランドへ行くことに。しかし、「好きな場所で好きな仕事を」という思いで再び海外へ渡ったにもかかわらず、さまざまな場所を訪れるたびに江田島市を思い出すようになっていたことに気付いた。「ただの田舎だと思っていた場所が、山とか海とか、ニュージーランドだろうが江田島市だろうが変わらない。夕日も目の前で見ている夕日に匹敵するくらい綺麗だったことを思い出して…海外にいるのに、江田島市のことが前より好きになっていたんだと思います」当たり前すぎて気付かなかった思い。広島に戻ろうと決めた瞬間だった。「ちょうど、祖父から新しくできるホテルがスタッフを募集しているということを聞いて。接客業にも挑戦したかったので、本当に運が良かった。江田島市のためになるかは分からないけど、頑張ってみようと思ってすぐに応募しました」

現在、田畑さんは江田島荘でお客様対応を中心に、フロント業務を担当。「海外にいた時と変わらないくらい刺激的で、働き甲斐があります。『好きな場所で好きな仕事を』が、今実現できているんじゃないでしょうか（笑）」さまざまな経験を経て、好きだと気付いた地元・江田島市に戻り、今は江田島市のファンが少しでも増えるように頑張って仕事をしている田畑さん。「もっと江田島市の魅力を伝えていきたいんですよ！江田島荘のスタッフとしてできることはもちろん、個人としてできることもたくさんあると思うので、私自身が江田島市での生活をもっと楽しんで、感動をみなさんに共有していけたらいいですね」

「またお話ししましょうね！」と明るく手を振る田畑さんの表情は実に晴れやか。その笑顔と過去を乗り越えた強さを持つ彼女の未来は、これからもきっと明るい。

田畑神菜

たばた・かんな／埼玉県出身　1996年11月12日生まれ

小学2年生の時、祖父母が住む江田島市へ移住。オペア留学制度を利用しオーストラリアで2年間を過ごす。海外生活を経て江田島市に戻り、現在は江田島荘のフロントスタッフとして勤務。